岐阜市立女子短期大学研究紀要第５２輯（２００３年３月）

小学校英語で活用できる効果的な教材開発に関する考察*

(A Study on Creating Effective English Educational Materials and Teaching Methods for Elementary School Children)

中村典生

abstract

The purpose of this study is to create effective English educational materials and teaching methods for elementary school children. Since 2002, many elementary schools have implemented English instruction as part of the Global Understanding (Kokusai Rikai Kyoiku) class. However, most elementary school teachers have had little experience in teaching English, and are in need of effective educational materials and teaching methods they can easily make use of.

Practical materials and their presentation methods are shown in this paper. More specifically, we present how English can be taught effectively to elementary school children through physical activity.

1. はじめに

学習指導要領の改訂により，平成１４年度より，小学校において国際理解教育の一環として英語活動が開始された。これに先立ち，中村(2001a)は，小学校で英語指導を行う際，まず最初に考えなければならない点について，以下のように述べている[1]。

(1) 絶対数の足りない外国人講師に頼りすぎるのではなく，英語を教えた経験のない公立小学校の先生が，簡単に活用できる英語指導法を構築し，それにもとづいた効果的な教材を作成することが急務である。

また中村は，実際に小学校で英語指導を行う際，留意する点は以下の４点であるとしている。

(2) 実際に指導する際の留意点は以下の４点である。
- a. 音声を重視する
- b. からだ感覚・五感を重視する
- c. イメージとその意味的ネットワークを重視する
- d. 遊びの中で英語学習ができるよう，楽しい雰囲気作りを心がける

さらに中村(2002a)は，今後英語が小学校での科目となるであろうことを予測して，いくつかの提言をしている。その大まかな内容は以下の通りである。

(3) 英語に熟達することを目標とした英語教育（活動）を行うべきである。

(4) 英語に熟達するためには，英語のストラクチャーに関する知識を系統だって身に付け，相当数の使える語彙を獲得しなければならない。(cf: 安井(2000: 7)

(5) 英語指導の初期には，イマージョンプログラムや全身反応教授法(TPR)などを活用することが望ましい。

(6) 音声中心の指導が望ましいが，高学年頃になると，文字（アルファベット）を使用しても良い。

さらに，中村(2002b)で実施した，小学校で英語活動に携わっている先生に対するアンケートの結果から，大部分が学校独自で英語活動の授業計画を作成することが困難であり，国，あるいは自治体等から，何らかのシラバスと，それに準ずるテキスト的な教材を示して欲しいという要望が強いということがわかった[2]。

本稿では以上のような現状と，(1-6)の提言を踏まえ，実際に日本人の先生が小学校で英語活動をする際に活用できる，効

果的な教材を開発することを試みる。

２．体験的英語教材開発に関する試案

本節では，日本人の先生が小学校で英語活動をする際に活用できる，効果的な教材開発に関する，基本的な方針を立てる。

２．１　英語活動の開始時期

現在，小学校で総合的学習が始まるのは３年生からであり，その総合的学習の中で，国際理解教育の一環として，英語活動が行われている[3・4]。これにしたがい，本稿でも中学年・高学年である３年生から６年生を対象に教材を作成することとする。

２．２　授業時間数（Lesson 数）の設定

中村(2002b)におけるアンケート調査によれば，小学校で英語活動に費やす時間数は，おおよそ１ヶ月に１時間程度，年間１０時間前後のところが多く，もっとも精力的に英語活動を導入している小学校でも，週に１時間，年間３５時間程度であることがわかった。この現状を踏まえて，週１時間（年間３５時間）で，各時間１課 が行えるような形の教材を作成することとする。3 年生から始めるわけであるから，６年生までの４年間で，合計１４０時間分の活動を行うことになり，それにあわせて，教材の冊子も１年各１冊，合計４年分，４冊を作成することとする。

２．３　教材の基本理念

本教材の基本理念は，英語活動を通じて，子供の英語力，国際感覚を育てることにある(see(3))。そのために，児童のヒューリスティクスを重視し，楽しんで英語に接することができるよう(see(2d))，体験的要素を多く採り入れることとが必要であると考える。具体的には，(2b)で示した，五感・身体感覚をもっとも重視することとする。

また，児童の英語力・国際感覚の育成に加え，(1)で述べたように，指導者自身の英語力，指導力も育成するということも念頭に置く。したがって，児童用の教材に加え，教師が活用，勉強できるような指導書の作成は，必要不可欠であると考える。

２．４　学ぶ内容について

小学校３年から６年までの間に学ぶ，言語材料，文法事項等の具体的な内容の選択に関しては，中学校で学ぶ内容との兼ね合いもあり，決定することが非常に難しい。小学校での英語は，現在はあくまでも国際理解教育の一環としての英語であるので，当然カリキュラムなども存在せず，また，中学校でやるべきことと，小学校でやるべきこととの棲み分けもできていないからである。

しかし，たとえ中学校で同じ内容のことをもう一度学ぶことになっても，あくまでも小学校では体験的な活動を中心に据えるということであれば，二度学ぶことになんら問題ないと考え，以下内容を決定することとする。

２．５　教材の形式

教材の形式については様々な形が考えられるが，(4)で述べたストラクチャーに関する知識を身に付けることを念頭におけば，単に単語だけを学ぶという形式を避けるべきであり，文を中心とした構成にすることが望ましいと考える。ただし，小学生に対して一度にたくさんの文を導入してしまうと，混乱を来す可能性も考えられる。以上を鑑み，各課４つ程度の目標となる文(target sentences，以下，目標文)を設定し，その文を習得することを目指した教材の形式をとることにする。

２．６　文字（アルファベット）の使用に関する問題

小学校英語教育学会会長の伊藤嘉一氏も指摘しているように，現在明らかにすべき最も重要な残された問題のひとつとして，文字（アルファベット）指導をどうするかという問題がある。この問題がクローズアップされるようになった発端は，1997 年の中央審議会答申の中で，「小学校に英語を導入する際，音声を中心として文字は用いない」という文言が発表されたことにある。これに対し，昨今多くの論文で，ある程度の文字指導は必要であるという議論が出され，文字導入派がにわかに優勢になってきているという現状である。

このような状況ではあるが，文字導入について考えるべき根本的問題点のひとつについて，中村(2001a)は次のように述べている。

(7) 音声と文字は，双方とも，ある事物を指し示すシンボルであるので，これらをセットで導入すると，音声とそれが指し示す事物との対応関係に加え，音声と文字との対応をとるという作業が増える。たとえば，「山などにあって，緑の葉を茂らせていて，建築資材などとして使われるもの」を指し示すシンボルとして，/ki/という音声や，「木」という文字を用いる。しかし，/ki/と「木」が同じ事物を指し示すということを理解するためには，/ki/と「木」を結ぶ，もうひとつの対応関係を成立させる必要があるのである。このように，音声と文字をセットで導入すると，音声と文字と指示物を結ぶトライアングルが成立しなければならない。英語には文字と音声の対応に例外が多いので，日本人学習者にとってこのトライアングルを成立させることは，非常に困難であることが想像できる[5]。

特に，大人ではなく，言語形成期にある小学生が英語を学ぶのであるから，以上に指摘された文字と音声を同時に導入する際生じる習得の困難さに関する問題については，一層考慮する必

要があるように思われる[6]。

また，文字導入に関する議論の最大の問題点は，いくつかの問題が混同されてしまっていて，議論自体がかみ合っていない部分が見受けられることである。問題点を整理すると，以下のようになる。

(8) a. アルファベット（文字）を全く知らない小学生が音声を中心として英語を学ぶ際に，文字指導をどの時期（学年）から導入する（あるいは最初から音声とともに文字も導入する）のが言語習得に有効なのかという問題

b. アルファベット（文字）がある程度読み書きできる小学生が音声を中心として英語を学ぶ際に，文字指導をどのような形で盛り込めば言語習得に有効であるかという問題

c. 文字指導そのものを，どういう形で行うかという問題

文字をすでに知っている児童に対しては，文字からの情報も得ることができるので，確かに英語学習において効果的な部分もあろう。しかし，音声を中心とした英語活動という前提では，(4a-b)で示したように，児童がその段階で文字をどのくらいすでに知っているかという程度差の問題があるし，ましてや，(4c)のように文字の導入法そのものの問題もあるわけである。これらを混同してしまうと，議論そのものが成立しなくなる。

このように，文字導入の最適時期，またその導入法に関しては，今後データを収集して，綿密に検討する必要があるが，ここではローマ字が小学校４年制で導入されることを鑑み，試験的な意味も込めて，４年生で文字を導入することとする。したがって，３年生用の教材である第一分冊には文字を全く用いず，第二分冊から文字を用いるものとして教材作成をすすめる。

２．７　付録

１．３でも述べたように，授業で英語活動を行う際，児童のヒューリスティクスが上がるよう，楽しんで英語に接することができるような場を作ることが重要である。したがって，毎回の授業では，児童が楽しんで参加できるような活動を採り入れる必要がある。活動に最も有効活用できる補助教材はカードである。毎回でてくる目標文に関係する絵カードを付録として添付することで，神経衰弱，ババ抜き，ビンゴなどの既成の遊びに加え，新たに様々な活動を考案することもできると考える。カードの形式は，表には絵（４年以降は英語のつづりも）とそのカードが添付されていた課だけが記されており，裏はトランプなどと同様に，全くすべて同じ模様とする。

２．８　指導書の構成

小学校の授業時間は４５分であるので，１コマのおおまかな授業計画は以下の表１ような形が望ましいと考える。

（表１）

時間（分）	内容
5	あいさつ。前回の復習。
10	導入。target sentences の確認
5	活動の説明
20	活動
5	まとめ

この時間配分を念頭に，円滑に授業ができるようにするために指導者用のマニュアル（指導書）を作成する。指導書には，その課の目標，場面設定，使用する言語材料，含まれている文化的要素をはじめ，目標文の意味，目標文に含まれている語の発音と意味，またその日の活動の説明と，その活動を導入・展開する際の注意事項等を掲載する。

また，指導者を教育するという目的で，指導書には「ワンポイントレッスン」と称し，音声指導をはじめとした，英語指導の雑学知識を提供する欄も設ける。以上述べた，指導書の構成を表にしたものが次の表２である[7]。

（表２）

目標：　その Lesson の目標を示す 題材（話題・場面）：　その Lesson の場面設定を示す 言語材料：　その Lesson で使う文の形式を示す 活動：　その Lesson で行う活動を示す 文化：　その Lesson に含まれている文化的要素を示す
Target Sentences その Lesson で学ぶ重要な文
児童用の本の構成 児童用の冊子がどのような構成になっているかを示す
Vocabulary（idiom） その Lesson の新出単語（イディオム）
Game（活動） その Lesson で行う活動とその指導法を詳細に示す
指導のポイント 指導上のポイント
指導者へのワンポイントレッスン 指導上，知っておくと役に立つ豆知識を示す

２．９　系統性

これまで出版された様々な教材，あるいは各小学校で作成された教材・授業計画等を見て一番問題を感じるのは，系統性が全く欠如しているという点である。国際理解教育の一環としての英語活動であるし，また，各小学校に英語の専門家がいるわけではないということもあるので，系統性を求めるのは酷であるという考えもあるかもしれない。しかし，今の段階では仕方ないにしろ，今後教科として小学校で「英語教育」が開始され，熟達を目指したカリキュラムが作成される可能性があることを考えると，いつまでも仕方ない，とは言っていられない。

系統性が必要となる最たるものは，学ぶべき言語材料の配置である。学んだものが，次に学ぶものの土台となり，知識を深めていくことができるようになることが望ましい。ただ，多くても週に一度の英語活動であるので，以前に学んだことを，忘れてしまうことも考えておかなければならない。必ず覚えるべき重要なポイントについては，繰り返し，教材に組み込むことが必要となる。

系統性を重視するという観点を導入すれば，自ずといろいろな面でのアイディアが浮かんでくる。たとえば，指導法にも系統性を持たせると効果的になる。たとえば，(5)で，英語指導の初期には，イマージョンプログラムや全身反応教授法(TPR)などを活用することが望ましい，と述べたが，特に全身反応教授法（以下TPR）を最初期に活用し，*Stand up.*（立て）とか，*Look at the blackboard.*（黒板を見なさい）のような表現をまずTPRで学べば，以降，クラスルームイングリッシュとしてこれらを活用できるわけである。この例のように，適切な材料を，適切な指導法を用いて教えることによって，以降につながる系統性が生まれる。

教材中のキャラクターにも系統性を持たせれば，児童の興味を喚起でき，言語材料の導入も容易になる。たとえば，児童用教材のキャラクターにもそれぞれ個性を持たせ，まず主人公を設定した上で，家族構成，印象的な友達などを配置する。また，高学年になって，過去や未来のことが導入される際には，その主人公の過去，未来のキャラクターを印象的に設定すれば，児童が楽しんで，無理なく過去，未来についての学習ができる。

以上のように，すべての面において系統性という観点を導入することは，効果的な小学校英語の教材を作成するために非常に重要であると考える[8]。

３．　授業計画の作成

２での考察をもとに，３年性から６年生まで，年間３５時間，合計１４０時間に学ぶ目標文と，各課の授業目標を作成した。紙面の関係で，以下の表３に，３年生分（第一分冊）の各授業目標を示す。

（表３）

Lesson	目　標
1	簡単な英語の指示に身体で反応できる
2	簡単な英語の指示に身体で反応できる
3	自分の名前が言え，友達の名前を聞くことができる
4	朝・昼・晩の挨拶ができる
5	Lesson 1～4 までの復習
6	色の英語を覚え，色を尋ねることができる
7	英語の右，左に関係する問いかけに，身体で反応することができる
8	副詞が関わる英語の呼びかけに身体で反応できる
9	文具に関する英語を覚え，問いかけに身体で反応することができる
１０	Lesson 6～9 までの復習
１１	英語で指示された身体の部位を指すことができる
１２	手足の部位に関する英語を覚え，身体で英語の問いに反応できる
１３	１～１０までの英語が言える
１４	１～１０までの数字に関する問いに，身体で反応することができる
１５	Lesson 11～14 までの復習
１６	英語の歌を身体を動かしながら歌うことができる
１７	初対面の挨拶ができ，知り合いを紹介することができる
１８	自分を中心とした家族の英語を言うことができる
１９	家族関係の英語を言うことができ，その役になりきることができる
２０	Lesson 16～19 までの復習
２１	教室にあるものの英語が言える
２２	動物の名前を言うことができる
２３	果物の名前を言うことができる
２４	前置詞が含まれている英語の問いかけに，身体で反応することができる
２５	Lesson 21～24 までの復習
２６	「～に・・・がある」という表現を使うことができる
２７	「～に・・・がある」という表現が含まれた問いに，身体で反応することができる
２８	英語の歌を楽しむことができる
２９	日本とアメリカのジェスチャーの意味違いを理解し，そのジェスチャーを実際にすることができる
３０	Lesson 26～29 までの復習
３１	科目の好き嫌いを英語で言うことができる
３２	スポーツの好き嫌いを聞き，それに答えることができ

	る
３３	様々な好みを質問し，またその質問に答えることができる
３４	様々な好みを質問し，またその質問に答えることができる
３５	Lesson 31～34 までの復習

表２からわかるように，５課ごとに復習の課を入れ，定着を図ることとした。各課には英語を体験的に覚えることができるような活動を配置した。

４．　教材，及び指導の実例

本章では，前章表３の中から，Lesson 7 を例として，具体的な教材とその実践例を示すこととする。

論文末にある資料１が児童用冊子における Lesson 7 を示したものであり，付録の絵カードがその次のページの資料２である[9]。２．６節で述べたように，３年生用の第一分冊では文字を使用しないので，このような絵のみの構成となる。以下，順次指導例を示すこととする。

４．１　導入（１０分）

まず，Lesson7 の目標文を児童用の冊子を見せながら導入する[10]。①の絵には，左手と上向きの矢印が描かれており，左手を上に挙げる(*Raise your right hand.*)という意味を表している。(5)を参照されたい。

(9)

Teacher:

（児童全員に向かって）　①についてやるよ

Look at me.

This is the right hand.　（右手を指しながら）

Raise your right hand.

（発音しながら右手を挙げてみせる）

Class.　（クラス全員に呼びかける）

Students:

Raise your right hand.

(動作をしながら先生の発話を繰り返す)

T: Raise your right hand.

（もう一度同じことを繰り返す）

S: Raise your right hand.　（同様に繰り返す）

この要領で，②から⑧までを続けて導入する[11・12]。２．６で示した方針により，児童用冊子には文字が記されていないが，それぞれの絵が示す内容は以下の通りである。

(10) ② Raise your left hand.

③ Put down your left hand.

④ Put down your right hand.

⑤ Raise your both hands.

⑥ Put down your both hands.

⑦ Don’t put down your left hand.

⑧ Don’t raise your right hand.

４．２　活動の説明（５分）

導入が終わると，早速その日に行う活動の説明に移る。Lesson 7 では，２種類の活動（ゲーム）が用意されているので，両方やるとすれば，２５分間の間に，２種類の活動の説明をし，実際にそれを実施しなければならない。したがって，できるだけ簡潔にルール説明をし，活動に移る必要がある。

４．３　活動（２０分）

４．３．１　アクションゲーム

一つ目の活動は，「アクションゲーム」である。先生の発話する目標文に準じた英語を聞いて，その英語が意味する動作をするというゲームであり，慣れてくれば動作にあわせて英語をリピートできるようにする。手拍子や音楽にあわせて発問したり，だんだん発問のスピードを上げたりすれば，一層緊迫感がある活動となる。

４．３．２　カード整列ゲーム

二つ目のゲームは「カード整列ゲーム」である。児童は資料２にあるような自分のカーを切り離し，ゲームに備える。先生が英語を発話するが，その英語の意味を表す絵カードを，発話した順番に並べて行く。たとえば，*Raise your both hands.* ならば，７－７，７－６という順番でカードを並べ，*Put down your eight hand.* ならば，７－８，７－１の順番でカードを並べて行く。これにより，日本語の「目的語＋動詞」という語順と違い，英語は「動詞＋目的語」という語順になる感覚を身につけることを目指す[13]。

４．４　まとめ（５分）

その日の授業のおさらいをする。

５．　指導書の内容

４章のように授業をすすめるための助けとなるのが，教師用の指導書である。Lesson 7　の指導書は以下のようになる。

(11)

Lesson 7

目標：　英語の右，左を含んだ問いかけに身体で反応できる
言語材料：　命令文（第三文型）
活動：　アクションゲーム，カード整列ゲーム
文化：　国による右側通行・左側通行の違いについて

Target Sentences:

① Raise your right hand.　（右手をあげなさい）
② Raise your left hand.　（左手をあげなさい）
③ Put down your left hand.　（左手をさげなさい）
④ Put down your right hand.　（右手をさげなさい）
⑤ Raise your both hands.　（両手をあげなさい）
⑥ Put down your both hands.　（両手をさげなさい）
⑦ Don’t put down your left hand.　（左手をさげるな）
⑧Don’t raise your right hand.　（右手をあげるな）

子供用の本の構成本文：

目標文の内容が端的に表された絵を並べてある

付録：

raise, put up, left hand, right hand, both hands, don’t を表す絵カードをつける。これらを組み合わせて遊ぶ。

Vocabulary:

raise [reiz]（動詞）　あげる
right [rait]　（形容詞）　右の
hand[h nd]　（名詞）　手
left[left]　（形容詞）　左の
both[bou]　（形容詞）　両方の

Idiom:

put down　下げる

Game（活動）：

1．上記の例文を使い，先生が指示を出し，児童がその指示に従って動作するというゲーム。徐々に指示のスピードを増していったり，対戦型のゲームにしても良い。音楽や手拍子に乗せて，英語で指示を出すテープ。
2．指導者が英語で指示し，その通りに絵カードを並べるゲーム。たとえば，*Raise your right hand.* という指示が出たら，自分の「上げる」動作のカードと，「右手」のカードを順に並べていく。*Don’t*～の命令文の場合には，最初に×のカードを並べる。　たとえば，いす取りゲームのように，３人のグループに２人分のカードを与え，それを並べておき，カルタ取りの要領でカードを取り合う対戦型のゲームにしても良い。

指導のポイント：

右手・左手・両手，あげる・下げるの組み合わせが６種類，また最初に Don’t をつけた否定の命令形があるので，全部で１２種類の英文ができます。日本語の場合，動詞が文の最後に現れるので，旗揚げゲームの「赤あげて，白あげないで，赤下げない」のように，最後まで動作が確定しないおもしろさがありますが，英語の命令文では，否定する際にはまず Don’t が最初に現れる難しさがあります。したがって，ゲーム１では，できるだけ子供が飽きずに楽しく遊べるよう，工夫する必要があります。また，ゲーム２のカードゲームは，英語の語順感覚を身に付ける練習になります。動詞の次に目的語がくるという感覚が，ゲームを通して自然に身に付くよう，繰り返し練習するのがいいでしょう。

ワンポイントレッスン：

○hand 中の[　]の発音について　母音とは，舌が口の中のどこにも接することなく，呼気が滞ることなく放出される際に出される音のことです。英語の母音の数は日本語の母音の数より多いので，日本人はどうしてもよく知っている日本語の母音の音に，英語の母音の音を当てはめて聴いたり，話したりしてしまいます。本課で登場した hand[　　]中の母音にしても，日本人は日本語の「あ」の音の異音（allophone，意味の区別をなさない変種の音）と捉えてしまいます。この[　]の音は，前舌低母音と言われ，口の中で舌が下がっていて前に出てきている状態で出します。以下に[　]を含むいくつかの語と，そのミニマル・ペアを掲載しました。他の音との区別に注意して発音練習をしましょう。

hat-hot-hut [h　t] [h　t]　[h　t]
bat-but [b　t] [b　t]
cat-cut [c　t] [c　t]

○右側通行(keep to the right)　現在，日本では人は右，車は左ですが，古くは左側通行が基本だったと言われています。日本では古来刀を左に差していたので，擦れ違う際に刀同士がぶつからないよう，左側通行になったのだという説があります。同様に，アメリカが右側通行になったのは，銃を右腰にさげていたからだという説もあります。　大戦後，日本にもアメリカ式が導入され，1949 年に人の通行は右側に改められましたが，鉄道や自動車の通行制度を変えるにはお金がかかりすぎたため，車道は左側通行のまま残ったわけです。

Vocabulary，Idiom については，その課の新出語彙のみを記す。またワンポイントレッスンに記されている母音の発音については，指導者が前もって練習しておくべきものであり，右側通行，左側通行の国による違いなどは，国際理解の一環として，授業中のどこかで時間を見つけて話すと良い[14]。

６．結語

平成１４年度から小学校で国際理解教育の一環として英語活動が開始された。しかし，小学校には英語の専門家がいるわけではなく，AET，ALT の外国人の絶対数が足りないことから，日本人の先生が英語の授業に活用できる，有効な英語教材と指導法を開発することが現代の急務となっている。本稿ではこの現状を受け，実践的な教材を作成し，それを用いてどのように指導していくかという例を示した。

今後英語が小学校の科目となる可能性が非常に高く，そうなるとカリキュラムが決定し，それに見合ったテキストが作成されることが予想される。本稿では紙面の関係上，すでにほぼ完成している１４０課のうちの１課分しか紹介できなかったが，カリキュラム決定に先立ち，本稿で示した身体感覚を重視した教材形式の有効性が認知され，ひいては日本の英語教育に貢献できれば幸い至極である[15]。

註

＊本稿での教材を作成する際，その全般にわたり的確なアドバイスをいただいた，筑波大学名誉教授で現明海大学教授の原口庄輔氏に深く感謝の意を表する。

本稿執筆の画像処理にあたり，ご尽力をいただいた本学英語英文学科 Randall Cotten 氏に深く感謝の意を表する。

本稿を執筆するにあたり，平成１４年８月１～２日に著者主宰により本学で実施した小学生対象の講座，「最新の早期英語教育を体験する講座－岐女短生と一緒に英語で遊ぼう－」で得られた知見に拠るところが多々ある。その講座の講師役を務め，素晴らしい成果を挙げた，平成１４年度中村ゼミ所属の１２名，岩崎巴，大橋美香，岡田幸子，川合則子，桑下真理子，末松綾，田内裕佳，中島瞳，中島恵，谷田貝友美子，山本有希子，米沢恵（５０音順，敬称略）に深く感謝の意を表する。

１．(1)の提言に加え，中村(2002b: 228)は，指導者を養成するための研修会を，自治体，学校レベルで積極的に実施する必要性について言及している。

２．アンケートの全有効回答数２５のうち，２４名が現行の小学校主体の活動計画作りに疑問を呈していた。詳しくは中村(2002b: 223-225)を参照のこと。

３．実際には，小学校１・２年も，ゆとりの時間などを使って英語活動を行っているところもある。

４．平成１４年度から完全実施されている新指導要領であるが，調査によれば，実際に英語活動を行っている小学校は，全国平均で６０％程度であるという。

５．詳しくは中村(2001b: 41)を参照のこと。

６．言語形成期，言語習得の臨界期に関する議論は，Lenneberg, E. H. (1967)，Genesse, F. (1988)，中村（2002c）などを参照のこと。

７．表２で示した内容に加え，簡単な指導案のサンプルを掲載することも考えられる。

８．系統性の重要性についての議論は，JASTEC 第２３回全国大会（常葉学園大学）で，著者が発表した際の資料を参照されたい。

９．これらの絵は平成１４年度本学英語英文学科一年，後藤祐美，青木希，服部夢香，平山瑤子（敬称略）によって描かれた。４名にこの場を借りて深く感謝の意を表する。

１０．本来ならば前回の授業の復習（５分）が入るが，その部分は割愛する。

１１．要所にできるだけ英語を使うことを心掛けていれば，授業をすべて英語でやる必要はない。２．９節で述べたように，すでにこれまでの Lesson で登場した表現の中には，そのままクラスルームイングリッシュとして利用できるものが多々あるので，極力それらを使えるようにすると良い。

１２．たとえば，*Raise your right hand.*を導入する際，*raise* が「挙げる」で，*right* が「右」，*hand* が「手」であると，日本語で説明する方がいいか，あるいは，(9)で示したように，日本語の意味を提示せずに導入する方がいいのか，という問題がある。この問題については，もう少し詳細なデータを収集し，検討する必要があるが，特に本教材は英語を「身体で覚える」ということを目指しているので，極力日本語の介在を避け，英語と身体感覚を直接結びつけることができるようにすることが望ましいと考える。

１３．カードが表す内容は以下の通り。

7-1 及び 7-3 right hand, 7-2 及び 7-4 left hand,

7-5 及び 7-6 both hands, 7-7 raise, 7-8 put down, 7-9 don't

今回は手を挙げた状態の絵と，下げた状態の絵を分けて描いたが，手を水平にし，挙げること，下げること両方に対応できるような絵を描く方法もある。

１４.国際理解教育が何であるのかということについては,様々な意見があり，ワンポイントレッスンで示したような，右・左側通行の違いが国際理解と言えるのかどうかということについても，異論があるところであると思われる。国際理解教育については，石坂(1993)，西中(1996)，川端・多田(1990)などを参照のこと。

１５．高学年には，聞き取りと発話を同時に行う訓練であるシャドウイングを利用しても良い。シャドウイングはリスニング力伸長に非常に有効な，スポーツ感覚で取り組める練習法のである。シャドウイングについては中村(2001c)，佐藤・中村(1999)，(2000)などを参照のこと。

References

Genesse, F. (1988), "Neuropsycology and Second Language Acquisition,"in Beebe, L. M. (ed.), 81-112.

石坂和夫(1993),『国際理解教育事典』創友社.

川端末人・多田孝志(1990), 『世界に子どもをひらく』創友社.

小池生夫(監修)(1994), 『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』大修館.

Krashen, S. (1973), "Laterlization, Language Learning, and Critical Period,"Language Learning, vol. 23, 63-74.

Krashen, S. (1985), The Input Hypothesis: Issues and Implications. Longman.

Lenneberg, E. H. (1967), The Biological Foundations of Language. John Wiley & Sons.

佐藤方哉・神尾昭雄(訳) (1974), 『言語の生物学的基礎』大修館.

文部省 (1999), 『小学校学習指導要領解説 総則編』東京書籍.

中村典生（2002a）,「公立小学校における英語教育の目標」『岐阜市立女子短期大学研究紀要』vol. 51, 73-80.

中村典生 （2002b）, 「小学校における英語活動導入の実態」『言語文化学会論集』219-229.

中村典生（2002c）,「早期英語教育の指導方針ーアルファベットを用いない教材の開発は必要か」『ことば考』ことばを考える会 proceedings vol. 1・2 合併号, 3-12.

中村典生（2002d）,「公立小学校英語活動導入を目前にして」『ことば考』ことばを考える会 proceedings vol. 1・2 合併号, 32-42.

中村典生 (2001a), 「早期英語教育への提言」『岐阜市立女子短期大学研究紀要』vol. 50, 37-46.

中村典生 (2001b), 「早期英語教育の課題と展望」『言語文化学会論集』vol.16, 63-72.

中村典生 (2001c), 「シャドウイングの理論と実践」『意味と形のインターフェイス』下巻, 中右実教授還暦記念論文集編集委員会(編), 1015-1025, くろしお出版.

西中隆(1996),『公立小学校における国際理解・英語学習』明治図書.

佐藤敏子・中村典生(1999), 「リスニングの指導とその効果的な学習環境」『つくば国際大学研究紀要』vol. 5,15-28.

佐藤敏子・中村典生(2000), 「英語聴解力と文法運用力」『つくば国際大学研究紀要』vol. 6, 55-65.

安井稔 (2000), 「早期英語教育に思う」『大塚フォーラム』vol. 18, 2-15.

田崎清忠 (編) (1995), 『現代英語教授法総覧』大修

（提出期日　2003 年 3 月 5 日）

（資料１）

Lesson 7

①

④

⑦

②

⑤

⑧

③

⑥

（資料２）Lesson 7 の絵カード

 ７－１	 ７－４	 ７－７
 ７－２	 ７－５	 ７－８
 ７－３	 ７－６	 ７－９